

# 鳥水氏実弟 小島栄氏を訪問して

鈴木 実

本年末に開かれる鳥水、理太郎、金次郎三氏の生誕百年展の資料を収集するため、八日六日、小島鳥水氏の実弟に当る小島栄氏のお宅を、芦屋市までお尋ねした。栄氏は本年八十五才とおききしたが、そんな高齢とは思えぬほどお元気で、御家庭の心配をよそに、毎日曜日には、六甲山に登っておられる由、さすがは往年の山男と感心させら

れた。当日はあらかじめ連絡をしていたので、栄氏は快よく迎えて下さった。早速、今日の訪問の趣旨をあらためてお話ししたところ、すぐにレリーニア山の登山の折の鳥水氏の写真と、御家族一同で写っておられる写真を拝借することができた。それに加えて、鳥水氏より栄氏宛の署名のある「山谷旅浪記」一冊もお貸し下さった。

その後、いろいろと山の思い出話をおききすることになるが、先ず話は上高地から始まった。昔のこととよく覚えていないがと遠慮さ影れながら、明治二十八、九年頃、徳近本峠を越えて、当時神河内ともいっていた梓川畔に出られたこと。栄氏「その頃河童橋といったかどうかはつきりしない。そうであるが、ともかく、一人がやっと渡れるほどの小さな長い釣橋があり、それを渡ると左右に大きく揺れてとても恐ろしかったとのことで、川幅も今

よりは広がったようだと言われた。付近は夏草が人間の背丈ほどに繁茂して、ただ一軒しか見つけられなかった。この山小屋にはよい温泉が湧いていて、一風呂浴びるのが大へん楽しみで、また窓から見た焼岳は、まさに一幅の絵のようであったと語られる。当時一人だけで、この辺まで来るものはなく、大抵は案内人と人夫を連れてきたもので、嘉門次も案内人の一人であった。人が少なかった代りに多くの牛が放牧され、草むらの中で急に牛に出会って、びっくりすることも多かつた。またこの草むらで、山小屋が判らず、空腹をかかえて寝こんでいた高校(旧制)の学生を案内人と二人で見つけて、小屋に連れこみ、助けたこともあった。この学生は野田テツゾウ、本位田某、武富某の三人で、今はどうしているかなあと、感慨深げに當時をしのびていた。

また兄の鳥水氏と二人で槍ヶ岳へ行く計画をたて、鳥々の村役場へ問合わせの手紙を出したところ、返事は次のようであった。「古来、槍ヶ岳に登山せし者、再び帰り来たる者なし故に、猛毒毒蛇が生息するとも思われ、ピストルまたは刀を持参されし」。この村役場からの返信(ハガキ?)は記録として山岳会へ提供したとっておられた。その他、富士山へは三十回以上登ったことがあるが、冬の富士山だけは、ほんとうに恐ろしかった。足袋に草鞋、外套、金剛杖で雪の富士に登ったときは、つるつる滑って生きた心地がしなかった。頂上のお釜には大木のようなつららが林のように底に向ってさがっていて、実に見事であった。大沢崩れを横切って、お助小屋(今の六合目か七合目の小屋)に着いたときは、ホッとしたりと語られる。

たびたび富士へ登るので、大裾野(今の御殿場か吉田?)の駐在(巡査)と顔馴染みになり、行けば必ず声をかけられるほど親密になっていた。また何十回もいくうちに、ふつうに登るだけでは面白くないので、夏は途中まで下駄ばかり登ったこともあった。その頃にはまだ関西には山岳会がなかったで、鳥水氏と栄氏の二人で、山岳会をつくることを考え、好きな仲間を一人一人訪ねて歩いたがなかなか集まらなかったそうである。兄よりは

栄氏の方が本気で走りまわった結果、やっとう京都で山岳会を設立したと話された。それでもまだ会員が少ないので、だれでも好きな者は入会させ、当時の歌舞伎役者の菊五郎や菊三郎を始め、座員のみなさんまでも山岳会員に加えられた。栄氏らと役者達との親睦の懇談会を開いたとき、役者達は、山男はさぞ大男だろうと想像していたが、みな小さな人達ばかりだったので驚いたという話もあった。

大正六年に坪内逍遙が左団次のための芝居台本を一般募集していたのに応募して、栄氏が台本をつくったそうである。その題名が「越後雪盲合物語」というので、その中に高山植物の名やカモシカなど山のけもの名もたくさん入られて、登山をPRしたところである。栄氏が舞台監督をしたことがあるという話は今では知る人もないであろう。また当時の山岳会にただ一人の女性会員がいたという。野口幽香子という名の女性で、学習院の人だったと覚えていたが、まだ御存命だろうかと感慨深く話された。日高信六郎さんと、学生時代の野球の仲間、よく試合をしたことを覚えておられる。もし日高さんとお会いできたら、昔語りや夜が明けるのも忘れるかも知れないとおられた。

以上、短かい見聞時間ではあったが、断片的ながら数多の思い出話がお聞かせされ、まだまだ面白話があるが別の機会に書くことにする。なお栄氏は筆者の訪問を大へん喜んでおられ、また年末の三氏の記念展も、わがことのように喜んでおられた。そして、いつも山の話をする相手もないので、いつか一人昔の思い出をいっしょに話しておしゃべりした。再びお会いする機会をつくって、ぜひこのような話の続きをやりましようという約束で、小島氏邸を離れた。



昭和48年(1973年)  
11月号(No. 341)  
社団法人 日本山岳会  
(J. A. C.)

## 目次

本文

小島栄氏を訪問して……鈴木 実 …… 1  
愛され、信頼された一生  
……………松本重治… 2  
甲申(故松方三郎氏へ)…榎 有恒… 2

会員通信(国内)

静岡県の一等三角点……水野公男… 3  
旅籠料……………柿原謙一… 3  
西クマネシリ岳……………成瀬岩雄… 4  
菅倉山……………笠原藤七… 4  
日中飯森山へ……………藤島 玄… 5  
火打山から金山へ……………三上正治… 6

図書紹介

大雪山……………望月達夫… 7  
アラスカ、最後のフロンティア  
……………松崎中正… 7  
黒部雑記……………広瀬 誠… 8

会員通信(海外)

北里大ヒマラヤ登山隊…河村栄二… 8  
RCC II エベレスト南壁隊  
3,4,5 ………………鹿野勝彦… 9

会務報告

復活新入会員、住所等変更…………… 9  
9月理事会……………10  
図書室便り……………10  
会員異動、ルーム日誌……………11  
上高地山研基金応募者氏名……………11

# 本会元会長 松方三郎氏逝く

永らく御療養であった本会名誉会員松方三郎氏は九月十五日に逝去されました。松方氏は数年前本会副会長をつとめられた後、昭和三十八年から四十三年まで五年間に亘って本会会長の重責を全うされ、また三年前には日本山岳会エベレスト登山隊長として活躍されました。本会には大正六年七月入会、会員番号は五三七番でした。謹んで哀惜の意を表します。

## 愛され、信頼された一生

松方三郎君を惜しむ

松本重治

三郎君は数知れぬ友を内外にもつていた。山の友、民芸の友、絵の友、ボーイ・スカウトの友、甘(うま)い食物の友、そして「聯合」「同盟」「国通」「共同」の友、みんなが三郎君の回復を祈っていたが、ついに叶(かな)わぬこととなった。

八月初旬までは、友人たちからの見舞状に対し、病院から、彼らしい絵のような文字で、返事を書いてきた。自己を語ることのほとんど無かった三郎君は、珍しくも、さる五月二十九日付で、療養中の旧友嘉治隆一君に長文を送り、彼の心境を次のごとくに語っている。

「お互いによい時代に生れ、よい友達に恵まれたものとつくづく思う。もう一度人生をくり返すことがあっても、まずこれ以上は望めぬかも知れない。その点で、せめて子供達のこれからの人生を、もっと豊かにしてやるべきであったら有り難い、というのが近頃の念願である。……とにかくご自愛を祈る。生死のことは神様まかせ。これは誰も同じことに非ずや?」(原文のママ)

「よい友達に恵まれ」云々(うんぬん)と彼が書いたとき、彼はおそらく「よい先輩」「よい恩師」をも含め

て考えていたのであろう。おなじ年の親戚(しんせき)の私は、六歳のときからの友達であったが、おりにふれて私に語ったこれらの先輩、恩師は、みんな三郎君の人生に稀(ま)れに見る豊かなりに寄与したのであろう。

茶目氣一杯で、いたずら好きの学習院中等科生を剣道で鍛えあげ、またボーイ・スカウトのキャンプに連れていった乃木(希典)院長、英語の魅力と国際的素養と仏教思想をいわず語りに教えた鈴木大拙、ドイツ語と西洋美術鑑賞の手ほどきをしてくれた児島喜久雄、宗教の問題と民芸の美しさに目をひからせた柳宗悦、文学の意味をわからせた長与善郎、角力(すもう)をとりながら絵を談じた岸田劉生、京大でマルクスを講じて、若い魂に正義感をかきたてた河上肇、社会批判やユームアに富む文章によって影響を与えた長谷川如是閑、また山登りを教え、三郎君に、生きる心構えと歩むべきコースを示唆した義兄の黒木三次などへの追憶が、三郎君の晩年の脳裏を満していたのであろう。

珠玉のようなエッセーやユームアのある短文は三郎君の特技の一つであったが、総合雑誌などには殆(ほと)んど

ど筆をとらなかつた。しかも内外において、押しも押されぬ新聞であった。多彩な趣味、幅の広さ、よい仕事には何にでも関心をもちつた。にぎやかな倫(たの)しい家庭をつくつたばかりでなく、友人には極めて温かく接した。友人から頼まれれば「ノー」といい切れず、私らが「よせばよいのに」といったに拘(か)わらず、ずいぶんと引き受けてしまった。棺を敲(たた)ってから数えてみたら、彼が主宰し、あるいは役員として関係した団体は約五十に達していた。彼の近年の二大事業たるエベレスト登攀(とうはん)と世界ジャンボリとは、彼は、文字通り全力投球をやつた。思えば、やりたいことは、ずいぶんやり通したものだ。二年に余る闘病生活のあいだに「苦しい」とか「痛い」とかいったことは、一言も吐かなかつた。ほんとうの母性愛を知らなかつたためか、三郎君は、生涯を通じて、人に甘えたことがなかつた。

謹んで松方三郎君の御霊前に申し上げます。君のこの二年に及ぶ強靱な闘病生活を知るものは、必ずや、再び健康の日を迎えられることと念願いたしておりましたが、御長逝と承り悲しみに堪えませんが、

七十四年の御生涯に、君の果たされた幅広い活動とその業績は枚挙に遑(た)りませんが、非凡な活動力と潤達な性格の致されたところと敬服いたしております。この満帆風を孕んで走るような日常にあって、何時も君の新鮮な生気の源泉は変わらぬ山岳への熱情であつたろうと思ひます。山好きにとっては、ささやかな登山も大規模なものも、みな同じく自然愛好に根差す心情と思ひますが、君はその何れをも楽しめました。

彼独特のさわやかな交友関係ができたのかも知れぬ。三郎君は、全く、ユニークな人間として、みんなから愛されたい。

三郎君の笑顔も、二人前平らげた元氣な姿もうない。かげがえのない人間松方三郎を失つたことは、ほんとうに淋しい。六十余年相許した私としては、惜しんでも、なお惜しみ切れぬ気持ちである。万感迫つて筆の運びに、乱れがあることを許された。

〔追記〕 筆者松本重治氏は学生時代日本アルプスの山々に登つたこともあり、のち英国留学当時、秩父宮殿下がスイス・アルプス御登山の際、横・松方の両氏と共に終始殿下に随伴して、アルプスの高峰に登つた。《山岳》第二十六年第一号「秩父宮殿下の瑞西における御登山の概要・波辺八郎」参照。

本稿は松方三郎氏の逝去直後、共同通信社のために認められ、一部の地方紙に掲載されたものであるが、故人の面影がよく描かれているとおもわれるので、筆者の諒解を得てここに転載することとした。

藤島敬男記

## 原稿募集

本会報の原稿を募集します。初めの方でも、新入会の方も、ふるって投稿下さい。

内容 内容は紀行文でも山に関する研究でも、あるいは感想でも随筆でも結構ですが、日本山岳会の「会報」であることをお忘れないうちにお願いします。記名に限りません。

長さ 長さも自由ですが、紙面の関係もあり、なるべく一頁以内になるようにお願いします。会報一頁は一行十七字で二百行です。できる限り一行十七字でお書き下さい。幸いです。

## 有恒

日本山岳協会 榎

## 弔辞

た。しかし今や神の御許に永遠の安らぎを得給うことでありましようが、詩篇に「目を上げて山を仰げば、救いは高きより来る」という意味の言葉があつたと思ひます。富士に初雪が来たとき聞きますが、君が限りなく愛した富士を仰ぎながら、ことさらに御霊の安からんことを祈りたいと思ひます。

昭和四十八年九月十九日

会 員 通 信

静岡県内の一等三角点

水野 公男

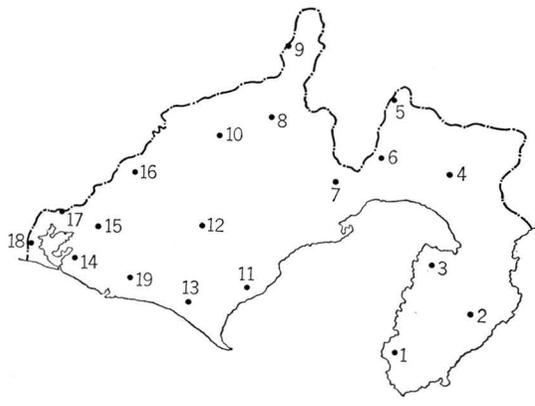
静岡県内にとつてどの位一等三角点があるのだろうか云々事だ二士会の話にも度々あがったが、正確な数が把握出来ないまま今年を迎えてしまつた。

そこで国土地理院に勤務されている武田満子さんに協力を願ひ、その調査結果から十九ヶ所が設置されている事が判明した。

すでに登つた山も多かったがあらためて三角点の標石の状態、櫓の確認とを記録写真にとどめようと再び全三角点めぐりを行い、四ヶ月をついやし全部調べ終る。

参考までに要点を記す。

①大峠(伊豆岩科村)五二〇・二米



松崎町一野田にてバス下車大峠を経て東方五〇〇米地点、標石は三角点の点一字が残っているのみできれいにけずり取られてゐる。櫓は無く雑草の中にとぼつんとあり。

②天城万三郎岳 一四〇七米 登山口は天城高原ロッジからでは万二郎岳を経て二時間半 櫓あり、標石はきれいである。

③達磨山 九八二米 すぐ近くにスカイライン開通したため徒歩一〇分程度展望は見事。櫓なし。

④愛鷹山 一八七米 沼津インターから御長屋一水神社からは二時間余芝生の三坪程の広場西側隅にあり、櫓なし。

⑤毛無山 一四四五米 朝霧高原バス停下車、麓部を経て約三時間。櫓はかたむきかけ、標石は赤ペンキで塗られてゐる。富士山の展望台として最高。下呂からのコースも大体同じ位。

⑥羽射三角点 三二〇・九米 附近の人々は、三角点又はテレビ塔と呼ぶ山。身延線芝川駅下車、富士宮方面に向ひ、安居山バス停下車し約三十分。テレビ塔のすぐ北側十五米程道の東側むき、櫓なし。

⑦竜爪山文珠岳 一〇四一米 新静岡からバスにて平山終点下車約三時間、櫓あり、東海自然歩道コースにもなつてゐる。展望は清水、日本平、静岡が真下に見られる。

⑧大無間山 二二二九米 大井川鉄道井川線奥泉下車、寸又林道で大垂沢橋までタクシーでも四分程かかる。これがかつての大垂沢小屋から五時間、櫓あり。標石もきれい。南アルプス南部の展望よし。登山者少し。

⑨赤石岳 三二二〇米 櫓は一番頑丈である。一番近い大井川橋島からでも十時間を要す。

⑩黒法師岳 二〇六七米 南赤石幹線黒道を利用して車で下西出沢から全コースの中を約五時間 櫓はなし。標石は真黒にススケたようで文字が見にくい。林の中で展望なし。

⑪高根山 一五一一米 榛原郡吉田町高根神社前に簡単な櫓ではあるが残つてゐる。標石は一等の一部分が大きい。だが赤ペンキで塗られてゐる。木立にかこまれ展望は少々。

⑫高天神山 二二二米 小笠郡城東町高天神社から尾根通し約一時間西の峰で、櫓はなく、標石は一等の文字の部分がけずり取られてゐる。

⑬神ヶ谷 三二七・二米 浜松市神ヶ谷バス停前に櫓はないが標石は五十糎余も露出したままコンクリートで下が固められてゐる。

⑭都田 四一米 静岡県農業試験場敷地内にあり、櫓なし。土盛された上に標石はきれいな面を見せてゐる。

⑮白倉山 一〇二七米 秋葉ダムわきの戸倉でバス下車、ナムチェ・バザールの思い出させる白倉部落を抜けて約二時間、櫓もしっかりして、標石もきれいである。頂上からの展望も得られる。

⑯富壽山 五三三米 愛知県境にあり、奥山半僧坊から徒歩で二時間、展望良好、頂上まで車で登れるのはつやけし、櫓なし。標石はきれいである。

⑰神石山 三二四・七米 浜名湖西方にそびえ、新所原駅より二時間余り、広場の片隅にボツンと、櫓はなし。

⑱磐田市高町 三三三米 雑草の繁つた小高い台地にあり、櫓なし。標石の文

字は風化し手ざわりで一等三角点を認み取れる状態である。

旅 籠 料

柿原 謙一

学生時代の岳友が、山形県の姥湯はすばらしいから一度は訪ねる価値があるという。そこで九月中旬のこと、奥羽本線の峠駅におり。通過した板谷駅には戦前訪れた五色スキー行のおりの面影があつた。しかし峠駅の光景はまた格別で、いかにも駅名にふさわしい風情であつた。

姥湯は滑川温泉から一時間余り歩いて、V字溪谷の溪流にそつて立つ一軒だけの山の湯であつた。屋号を樹形屋という。二階建の古風な宿であるが、柱は目立って太くて鯨尺でたつた。四寸は角材だつた。鯨尺に耐えた古い宿の暗い板の間を歩くと、ギニーギニーという音がした。まず内湯につかる。すべて木造りで、小説「天菩薩峠」の挿し絵を想わせる浴室があつた。湯は頭上の管の端から小滝のように音をたてて浴槽に落ち込み、底には白い湯花が沈殿してゐた。硫黄の香りがする。冷い風が吹きこんできた。

部屋へ戻る廊下で、地元のお百姓さんたちであるう浴衣がけの湯治客数人に遭つた。いずれも自炊生活である。あけ放つた部屋にねそべつてゐる客もいた。わが部屋に入ると、また太い柱が目をはひく。使い古した火桶に炭がついてゐる。古い火箸と真鍮製の小さい灰搔がさしてある。なにしろ万事これ古風の一語につきた。

宿の上手に露天風呂があるという。見にくく、地元湯治客らしい人が川べりの小型な湯壺のなかにいた。体格の良い肉厚の人と痩せ型で筋肉質のおじさんだつた。「湯に入つてこの景色をみないかね、佳い景色だよ」と山

形弁である。「手拭をもつて来なかつた」と答えると、「湯であつたまつてからすこし立つてれば、すぐ乾いてしまふよ」ときた。つらねに裸にして湯壺から四圍の奇岩や針葉樹の山肌を仰ぐ。あちこちに元湯の煙がふいてゐる。「朝早いときにはカモシカがすぐ先まで来ますよ」と太った人がいう。上手のガレ場から小雨に濡れた登山者がおりてきた。やがて部屋にもどる。ランプに灯がもつてゐた。

翌朝支払いをすませて出発。露天風呂をすぎ大沢入を涉つてガレ場を登り、兵子の頂に立つた。天候は恢復しつつある。リンドウの美しい家形山から五色沼・一切経山と歩いて信夫高湯に泊る。クラス会の連中はすでに到着してゐて、一杯やっていた。「行きがけの駄賃登山をすませてきた」といふと笑われた。

翌朝クラス会の一同は、自動車で浄土平から会津経由郡山にでるといふ。「ではこちらはトンボ返り登山といふことで、安達太良にゆく」と一同に別れて福島駅にむかう。その安達太良にはほんとうの紺い空があつた。花笠と色づいてきたナナカマドもきれいであつた。

こんな次第で、クラス会をはさんだ初秋の旅は終つた。帰宅して姥湯の宿泊料は安かつたといつて、領収書の件に見せた。件は突然ゲラゲラと笑ひだして「親爺さんよ、ここに旅籠料と書いてある。姥湯は良いネ」といふ。

それは気がつかなくつた、よく眺めると内訳欄にたしかに旅籠料と書いてあつた。いま時こんな領収書は珍らしい。なんとはなしに「草枕」の時代に通ずる匂いがする。姥湯で味つたいろいろな古いものが、雑多でまじりつつかなくつた私は、アアあの火桶と旅籠料こそ東北姥湯の味なのだといふて焦点がさだまつたのである。

「手拭をもつて来なかつた」と答えると、「湯であつたまつてからすこし立つてれば、すぐ乾いてしまふよ」ときた。つらねに裸にして湯壺から四圍の奇岩や針葉樹の山肌を仰ぐ。あちこちに元湯の煙がふいてゐる。「朝早いときにはカモシカがすぐ先まで来ますよ」と太った人がいう。上手のガレ場から小雨に濡れた登山者がおりてきた。やがて部屋にもどる。ランプに灯がもつてゐた。

### 西クマネシリ岳

成瀬 岩雄

今度、久しく憧憬していた西クマネシリ岳に登れたのは何より幸であった。北海道支部の皆さん、特に山麓の宿舎まで会々車で送り届けて下さった帯広の本会委員の大蝶さんには衷心より御礼申上げる次第である。

十勝三岐の小学校の校長さんと若い先生の御教示によってシノノスケ沢出合で電源開発会社の好意による車を乗って歩き出したのは七時前であった。いつもの通り仲間には強豪、牧野君。小生の植物の師と仰ぐ牧野君と路傍のハクサンチドリ、ゴゼンタチバナ、三花葉などを賞でながら時々原始林を通してラチチラ見えるピリベツ、クマネシリの両山の鞍部を目指して登るのは何んとも楽しく、足許も軽く進むのであった。校長先生の話しでは雪どけ後では今年はいわれが最初の登山者だろうとの話。大体、昨今でも、この辺の山などに来る人も少ないとの話だが登路は意外に判然しているにも拘らず漸く乾いた落葉を蹴散らした様子もなく静寂そのものであった。名も知らぬ野鳥のコーラスと猛烈なブヨの大群だけがわれわれを迎える生物だけだ。この地方ではピリベツ岳とクマネシリ岳は両者、「オッパイ山」と称する由で十勝三岐から遙かに眺めると成程、殆んど相似形のお乳が左右に対峙して、その鞍部を目指してわれわれは登るのであった。白樺の疎林に達すると石狩、ニベツの白い膚。その鞍部の奥にトムラウシが見える。鞍部から先は岩尾根に変わり、手掛り、足掛りのいい処を見つけては右方の西クマネシリ岳頂上を目指して、はやる胸を押えて進む。珍らしい紫色のツジが時折、岩蔭げに顔を出して来る。十一時三十分遂に頂上に達する事が出来た。十坪も

ない、ハイ松に囲まれた頂上の展望は何んと素晴らしい事。その昔、旧友たる慶応の本郷、齊藤両君がピリベツ川を三日か四日掛って忠実に溯り、クマネシリの西クマネシリ岳に登り、ハイ松の苦闘した話しを聞いて以来、いつかは登りに来たいと念願していた山だけに山頂に達した時は思わず牧野君に手を差し伸べて握手を交わさざるを得なかったのである。そして今は亡き畏友か、齊藤君のありし日の勇姿を一瞬、眼に浮かぶのであった。それに今日は紙屑、空籬何一つ眼に入らぬものがない登りだったのだから、こんな登山は矢張り北海道の隅の山でなけりや到底味わえない山行だといつくく久振りで「山に来た……」という感をしみじみ味わった。山頂で早速、青空を仰いで昼寝の大字。快い満腹の後、一時近く下山に掛った。漸く声別岳方面を覆って来た黒雲と遠雷に促されて只管降り急ぐのみであった。今朝、車を棄てたシノノスケ沢手前約一時間の処で遂に大雨に襲われたが久恋の山頂を踏んだ喜びに輝かれわれはこれの雨もまた一興。迎えて来てくれた車に乗って校長先生のお宅に帰り着いた頃は凄しい雷雨になってしまった。しばらく縁先に休ませて貰っている内の話。昨日、近く音更川の源流で、令息が目の下八寸から一尺位の岩魚を一時間そこそこ内に九十四も釣って来たとの事。何しろ白樺の林に囲まれ、閑古のコーラスに思わず青空を仰ぐと石狩、ニベツ、クマネシリ、ピリベツと……。こんな小学校の先生、生徒は何んと思われた事か。生徒は男女合せて三十八人。先生は八人とか。正に別天地とはこの事か。デパートでオタマジャクシやカブト虫に眼の色を変えている親子も一方にある世の中とは、所代われれば品も代わる風景ではないか。あわれなる哉……。「汝あわれなる者よ……」の

キリストの言葉を小生思わず借用して見たい衝動に駆られるのである。この度の山行について勿論一言もいうところは無いのだが、ただ残念な事にはアイヌ語の山名地名が段々なくなり似ても似つかぬ観光屋の速成の名前に代わって行く事だ。文字を持ってないアイヌ族は見たままの素直な実感で山名地名をつける。アイヌ族には段々地図上から消え去って行くのがなんとしても淋しい限りだ。如何にも語呂のいい、名前を聞いただけでも行ってきたような様なアイヌのつけた地名の山、川……、が小生を今でも北海道の山に引付けた原因の一つでもあるだけに一まつの淋しさを感じるのであった。それにもう一つ、嘆かわしい思ふのは駅通のなくなってしまう事だ。これこそ北海道の独特のものであったのだが、交通の発達に波に押されて今は一ヶ所もない。小生の数少ない駅通泊りに昔、喜別の一夜などは今となっては貴重な思い出となってしまった。駅通から駅通へと渡り歩いて未開の奥へと、アイヌ語の山や川を放浪された伊藤秀五郎さん等も恐らく心中、淋しなきにしも非ずと拝察仕る次第なのだ。何しろ、畏友、伊藤秀さんなどは、内地で言えば時代、年令こそ異なれ、北海道の山や沢にかけては木暮さんや中村清太郎さんに匹敵する先覚者なのだから……。

### 唐倉山(地図「針生」)

笠原 藤七

唐倉山(木伏)村の辰巳(南東)の方三十一町余にあり。登ること十三町ばかり、さまでの高山ならざれども最も峻しく、峯を伝ひてわづかに一路を通ず。其間許多の奇岩あり、佳観とす。麓より登ること八町余に鑑岩と云ふあり。其左に時つて裸岩と云ふ。鑑

岩の上二町三十町余に石柱と称する岩あり。方四尺ばかりにて長四間より五六間ばかりの石三十余枚あり。屋材を架するに似たり。故に名づけり。昔は数も多かりしが、何の頃にか、地震のため其半を崩せりと云ふ。此より上に鳥帽子屏風手掛衣掛等の怪石往々に列峙す。衣掛より一町余にして頂上に至る。明神岩あり。昔唐倉明神鎮座ありし所ゆえ此名遺れり。冬日満山雪滿つればも此嶺のみ風烈しく積ることなし。土人は社跡のみ風烈しく崇敬す。また明神岩より左右の下りに數十の怪石一町ばかりの間に布置し、累々として相仍れり。南を日光岩と云ひ、北を月光岩と称す。此処より北に望めば、飯豊磐梯等の高山遠空に浮び、南に顧れば、燧燧嶽嶽近く衆峯に秀で、眺望広し。此山東北の方小屋村に属す。

右は新編会津風土記(以下風土記と略称)の唐倉山に関する記述を多少読み易く書き換えた全文である。(括弧筆者)私がこの唐倉山に関心を持つに至ったのは、数年前、風土記の頁をめくっているうち、普通の山については僅かに二三行を費すに過ぎない風土記が、この山に関しては前掲の如く相当のスペースを割き、その上その写生図まで掲げているのを見て、これはちょっと面白い山と思ったからである。またその写生図が恰も雲表にそびえる岩稜を見るが如き趣を持っていたのも私の引かれた一因であった。

前記風土記の記述で唐倉山の大体のことは判るのだから、何分にも百四五十十年前のものだから、何か新しい資料はないかといういろいろ捜して見たが何も得るところはなかった。それでこの小文を寄せて唐倉山を紹介することとしたのである。

五月二十日私は一行四人で会津高田の西北郊四・五キロに在る、浮島で有名な蓋沼を訪ねた後、この山に登るべく、一行と別れて一人足を伸ばして山口に至り、常盤屋という宿屋へ泊った。その時私は宿での聞き込みを唯一の心頼みとしていたのだが、宿ではおかみ若い頃一度登ったことはあるがよく憶えていないというし、おやじに至っては一度も登ったことがないというので、ただ木伏の南の八久保沢から径があるらしいというところしか判らなかつた。そして、翌日おやじが八久保沢の奥まで自動車で送ってくれたのが、私には思わざる僥倖をもたらすこととなったのである。

二十一日は七・一〇山口発。沿道の田浦は今さつきが始まっていた。おやじは道々車を停めて知人に山の模様を尋ねてくれたが、知っている人はいなかった。木伏の部落を過ぎて林道へはいると間もなく一人の老人に追いついた。彼は木伏の人で、これから奥へへつりに行くところであった。唐倉山はよく知っているらしいので車に同乗してもらった。案の定山には詳しくは結局、登り口の、山をよく見える処まで来て親切にコーラスの説明をしてくれたのはありがたかった。

林道を三キロばかり上ると道は二又に分れ、左へ小さく二曲りする扇状地の桑園へ出て豁然と展望が開け、始めて全山まぶしような新緑に包まれた唐倉山の全容を一望することができた。左から坊主岩、鑑岩と岩稜が頂上まで続いている様な風土記の写生図そっくりである。この扇状地は、地図に就いていえば、唐倉山頂上から、その西北一〇三九米標高点との鞍部から出ている谷の合出附近で、標高は七〇〇米である。風土記の「麓」は、図上の計測では距離的には少し合わないが、この辺をいったのではあるまいか。宿のおやじに、地元の宿屋のおやじが一度





紹介書



大雪山—中央高地の自然—

北海道の自然、殊に山岳は、日本のなかでいまでも最も原始的な香の高い処であることを、私は僅か三年間の在札時代にしみじみと感じていた。なかでも大雪山を中心としたいわゆる中央高地の山々は、その変化の妙、景観、動植物等から言って、日本の山岳景観のなかで、神がわれわれに与えた最も美しい自然の宝庫と言つて過言でなからう。それを表現することは、なま易しいことではないが、この度北海道在住の人々によって完成された写真集「大雪山」は、ほぼその目的を果たし得た素晴らしい作品と言つて差し支えないまい。

敢て附言しておきたい。私は本書を讀きながら、息をのむような、こんな美しい山の自然美を破壊することなどというところが、一体どういふことなのか。北海道をも含めて、いふ日本を一番考えねばならないのは、どんな目的であれ、もうこれ以上日本の自然をそこなう行為は一切禁止しなければいけないという、常日頃思つていふことを改めて痛感したのである。本書がその面でも大いに役立ってくれることを望んでやまない。

(31×26 cm カラー写真九六頁、解説等二二頁、一九七三年四月一日、北海道撮影社発行、定価九五〇〇円) 望月達夫

アラスカ

最後のフロンティア

東 良 三 著

栗林一路氏の「アラスカの山に挑む」(雪華社一九六七年)はユニークな単独登山の記録であるが、アラスカの一般的なガイドブックとしても、大いに役立つものであった。

こんど出た東良三氏の「アラスカ最後のフロンティア」は登山のための本ではないが、アラスカの歴史と自然を手際よくまとめて紹介している好個の読物である。近ごろ盛んになってきているアラスカの旅行に出かける人には勿論のこと、山に登りにゆく人にもたいへん参考になるであろう。アラスカの山に登るには、まず水河のことを知る必要があるが、この本に書いてあるような土地の歴史とか風物について勉強しておくのも決して無駄ではないはずだ。

内容は、第一部アラスカの発見とロシア領時代、第二部アメリカ領有後のアラスカ、第三部現代のアラスカ、第四部アラスカの観光、とわかれてい

が、この本のポイントには前半の歴史的事記述にあると思われる。

中央アジアの山が興味深いのは単に山が高いからだけではない。その土地に秘められた歴史についても、地球上の他の山岳地帯は比べものにならない。この点アラスカの歴史もまた同じ。貧弱といわなければならないが、それでもこの本の過半のページを割いて語るだけのことはあるのである。十六世紀後半のユザックのシベリア支配から筆は起され、ベリングの探検から戦後のアラスカに至るまでの経緯が非常によくまとめられている。アラスカの歴史の中にも日本人の活躍があったことなど興味深い話がある。

それに比べると、後半の三部、四部はやや通俗にすぎ、物足りない感じがする。長い間アラスカの野生の大地に親しまれた著者であるから、山岳や水河など、この北地の自然についてもつつつ込んで書いてほしかったと思うのは私の欲であるうか。

アラスカの山岳の説明に、セント・エリ阿斯山塊という項を入れ、ローガンをはじめルカニス(ルケニアの間違い)、フーバー(ハッパードの方がよからう)などを含めているが(一七〇ページ)これらはカナダ領の山なのであるから、そのことをひと言断つておかないと、記述に正確さを欠くことになる。

現在アラスカでは、ノース・スロープからのバイブライン計画は大きな問題で、昨年私たちがアラスカの山を訪れた時も、町には賛否両論が入り乱れて華ばなしくやっていたのを見受けられた。この話題は(自然保護の立場からの反対論も含めて)ぜひとも取りあげるべきだろう。最後のフロンティアたるアラスカといえども、すでに開発だけでなく、保護を考えなければならぬ時代きているということ。

アラスカの人たちも強く認識している。

外国の地名人名をカナで表記する際には問題が多い。ローマ字綴りの読み方だけでなく昔からの流儀であったように、地球の狭くなった今日では、その国での発音になるべく忠実なのがよいのではないか。エッジカンプ、バルマー、ハインズ、ゲーデン山、ルシアン・コロニーなど、抵抗を感じさせるのが目につく。それぞれ、エッジカム、バーマー、ハインズ、ジャージン、ラッシュンとすべきたと思う。カースン Karensen は(マッキンリー初登頂者の一人)を発音したものであろうが、問題がありそう。地名人名は吉沢一郎氏がよくやっておられるように、横文字で表記してしまえば無難だが、本書のような一般書ではそれもできまい。

アラスカに多いハックルベリー、クランベリー、ブルベリー、サモンベリーなどを全部ノイチゴとしてしまるのは(二三八ページ)、無神経すぎるであろう。コケモモやクロマメノキの実を私たちはイチゴと呼ぶだろう。口絵写真は、観光会社の棚から買ってきたリーフレットみたいで下品である。「ツンドラ地帯とマッキンリー連峰」と題するものには、マッキンリーは見つからないし、前景のあれだけよく木の生えている所は、普通ツンドラとは呼ばないであろう。(無理して森林ツンドラと呼べないこともなからうが) メンデン水河はちゃんもメンデンホール水河として貰いたいものだ。

巻末の英語のアラスカ関係文獻は有益だが、一般読者のためにはむしろ明大の「アラスカ」などをはじめてみる日本でも出されたものも取りあげるべきだろう。

いろいろと注文をつけたが、本書はアラスカの最新のガイドブックとして

素晴らしいものであることには間違いない。一九七三年七月 山と溪谷社発行 A5判二六九ページ 一三〇〇円

次に、蛇足ながら、本書にあげてなく、私の興味を持つものを何冊か紹介しておく。

THE MILEPOST Alaska Northwest Publishing Co., Anchorage 毎年新しく出ているアラスカのハイウェイのガイドブック。車で旅行する人には便利。名古屋学院大学アラスカ研究会からこれをほぼもとにしたと思われる日本語版の「アラスカ・北西カナダ」が出てゐる。しかし恐ろしく間違が多い。

A TOURIST GUIDE TO MOUNT MCKINLEY by B. Washburn, Al. Nw. Pub. Co., 1971 マッキンリー国立公園を訪ねる人の必読書。筆者は人も知るアラスカ山岳の世界的権威。

ALASKA, LIFE ON THE LAST FRONTIER, Al. Nw. Pub. Co. 写真の沢山入った月刊雑誌。なお、この出版社からはほかに狩狼のガイドブックや画集などが出てゐる。

AN ALASKAN DICTIONARY by R.O. Bowen, Nooshnik Press, 1965 普通の英語でも、アラスカでは特有の意味を持つものがある。エスキモーの言葉で、一般に使われているものもある。そういうのが大変ユーモラスに解説してあり、一語一語の中に辺境の地の強烈な印象がよみとれる素晴らしい冊子である。わずかにドル。

DICTIONARY OF ALASKA PLACE NAMES by D.J. Orth, U.S. Government Printing Office, Washington, D.C., 1971 アメリカの国土地理院編集のほう大な地名辞書。アラスカの地名はすべて所在から

命名の歴史にいたるまで正確に書いてある。巻頭に息をのむシヤルディン火山の写真、巻末に美しい二百五十万分の一の地図がついている。政府の刊行物であるためか、安い。ちなみにノームの項をみると、東氏の本の解説(一二二ページほか)と少し異っている。

ENVIRONMENTAL ATLAS OF ALASKA by P. R. Johnson and C.W. Hartman, University of Alaska, 1971 アラスカに関する理科年表のようなもの。アラスカの陸地、水、日射、気象などについて興味深い数値が並んでおり、これ一冊でアラスカの自然環境はすべてわかる。

FLORA OF ALASKA AND NEIGHBORING TERRITORIES by E. Hulthen, Stanford University Press 1968 特に北地や高山の花に興味のある人に。北方植物の神様フルテンの近著。この一冊でアラスカの植物誌は確立された。アラスカの花を扱った本はほかに数冊でているが、これに比べればすべて「子供の絵本」である。

黒部 雑記

湯口康 雄著

湯口康雄氏の「黒部雑記」が刊行された。私がかねがね「岳人」誌などで氏の研究に着目し敬服していたのであるが、それらの注目すべき論考が一冊にまとめられたことは、ほんとうにうれしく心躍る思いである。

氏はこの書の「あとがき」の中でこういっている。「わたくしにとって黒部は地元である。いわゆる山というものを身近に感じはじめたころ、その湯きをまずこの地元で癒そう、と思った。しかし、黒部はそのころ、すでに先人によって秘密性がほとんど取りのぞかれていた。おそく生まれてきたことを

悔いてもしかなかったがなかつた」と。昭和十一年生まれの氏の歎きである。こうして氏の「落ち穂拾い」がはじまった。氏は血眼になって、先人の窮め残し踏み残したものを探し、拾い集めた落ち穂を集積してこの一冊とされたのである。

本書の前半十三篇は「記録」である。冠松次郎氏も塚本繁松氏も探り残した未知の谷々に分け入り、その貴重な探検をメモしたものである。後半十三篇は黒部奥山の史的「研究」である。この種の研究としては、三十数年前、中島正文氏が先人未踏の分野を切り拓き、「黒部奥山と奥山廻り役」など不朽の業績をうちたてられたが、湯口氏は中島氏のとをうけ、中島氏の論に残した問題を求め、広く古文獻をあさり、これらのすぐれた研究を生みだされた。その文献博搜の努力は驚嘆すべきものがある。

中島氏は山岳古文獻の採集にかけては第一人者であり、他の追隨を許さぬ権威者であるが、山谷の実地踏査については湯口氏ははるかにベテランである。湯口氏は、古文獻をその実地踏査によって確証してゆく点に独自の強みをもっている。「西鐘釣・小黒部への道―片貝谷からの黒部往來―」のごとき、従来不明確であったサンナビキ越えのコースを、一歩一歩実証して小杉復堂が明治二十八年、小川谷・北又谷・柳又谷を経て登った大蓮華山について、白馬岳ではなく、白馬嶺であるのかもしれない」という指摘など、実地と文獻との厳密な対照研究によってでなくては、言い得ないところである。

片貝谷村役場所蔵の「黒部横断道路之図」の発見紹介、最初の薬師岳登山記を書いた城川範之氏の業績の紹介など、目を見張られるものがある。源次郎尾根の源次郎というのは屋号であ

って本名は佐伯源之助であること、助七も屋号であって本名は佐々木助三郎であること等、越中ガイドの本名と屋号との関係についての従来の混乱を解明すること、まさに快刀乱麻を断つ観がある。本書によって、日本の登山史も、あるいは加筆、あるいは訂正すべきであろう。

最後に「僧ヶ岳の入道」「越中駒ヶ岳の雪形」「蛇石について」の三篇を添えている。雪形や民間信仰や地名についで民俗学的研究である。越中駒ヶ岳の雪形を解明したのは本論文が最初である。

「雑記」の書名のとおり、一冊の本としてみるべきとき、いささか雑然としているが、これは先人の落ち穂拾いの集積であるためで、やむをえぬであろう。雑然とはしているが、その一つ一つは、あるいは重要な探検記録であり、あるいは貴重な研究成果である。記述は平明で、いくぶん淡々としすぎているところがある。この文章に磨きがかかったならば、もっともとすばらしいものになったであろう。

世に登山家は少なくないが、山岳史研究家は容易に得られない。湯口氏は中島氏の学統をつぐべき貴重な人物である。この一冊が日本登山史に貢献するところは多大である。氏の処女出版を心から喜び、氏の今後の御健闘を祈って拙い紹介の筆をおく。

忘年会のお知らせ

12月20日午後六時、本会ルームで恒例の忘年会を行います。会費五〇〇円。そのほか二〇〇円相当のプレゼントと手紙をつけてご持参下さい。

会 員 通 信

海外

北里大学ヒマラヤ登山隊より

前略、私達北里大学ヒマラヤ登山隊は、会員の多くの方々からのご協力、ご援助をいただき去る七月三十日に先発隊二名(菊池充弘、武市守弘)を羽田から送り、本隊四名(河村栄二、羽後和夫、守山栄賢、市川弘美)は八月十六日羽田を出発することができました。八月十七日に全員がカトマンズで顔を揃え、ランジャン氏の経営するエクスプレス・ハウスに到着しました。今年三月に新築したばかりのレンガ造りの気持ちのよいハウスです。ランジャンさんは隊員よりも上手な日本語を話しますので若い隊員も日本にいるようだといふくらいです。カトマンズもモンスーンの中ですが、一日の中で大部分は晴間が強い日射しを落しています。時々さあっと降りだします。空気が乾燥していますので、むしろ暑さは感じられず、家の内は涼しいです。

八月二二日で公式のお役所の手続き、挨拶を終え、目下予定のサード、ラクパ・ノルブを待っております。諸種の事情により、ジャムラヘチャータ機三機を飛ばすことにしましたが、ジャムラが三、四日晴れて、土が固まるまで飛ばないとのこと、九月月上旬までは無理と思います。

カンジロバ・ヒマールへはジャムラよりカグマラ峠を越してボクスムド湖に達し、ここからボクスムド・コアラをつめて約四〇〇〇m付近にBCを設営する予定です。BC到着は10月上旬、アタックは10月25日前後を考えています。

目下装備と食糧の一部(ジャムラでは殆んど購入できない)購入と再梱包を行って待機中です。またご報告致します。

R C C I I

エベレスト南壁隊より

第三信 私達エベレスト隊は8月10日すぎより、順次シャンボチエのホテル、エベレスト・ビュローを出発、高度順化を行いながら、キャラバンの後半をすすめてまいりました。標高三、八〇〇mから五、三五〇mのベースまでのこの間の前半は、いま一面のお花畑で、岩陰にはあの青いケシも咲き乱れ、雲の切れ目からは真白なヒマラヤ群を望む、キャラバン中最も快適な日程でした。さすがにロブジエ(四、九〇〇m)あたりからは、一部の隊員に頭痛、吐気といった高度の影響があらわれはじめております。しかし大半の隊員にとっては、はじめて経験する高度だけにこれも当然のことでしょう。全体としてはほぼ順調な進行と考えております。

一方、約三〇トンの隊荷は二十四日、すでにベースに集結、隊員、シエルバの約半数も同日ベース入りし、二十五日からは隊荷の整理、キャラバン地の整備等にかかっております。二十五日中にどうやらBCらしい形がととのったというものの、何分大規模なものになるために、細部まで完成するのは八月末になりそうです。それにしても、イタリイ隊による汚れは著しく、私達も徹収時には心しなければならぬと、つくづく感じさせられました。

ベース周辺は春に訪れた時と比べてセラックスはかなり小さく、またうす逆れた感じとなり、アイスフォールは逆に深々とした印象をおおわれて白く、大分変わった雪をうけています。ただ屋となぐ夜となぐ起る周囲からの雪崩のひびきのみは相変わらずです。

天候は今のところ、思ったほど悪く

なく、この分なら八月末からアイスフォールのルート工作開始も可能かも知れません。ともかく期待と不安の半ばした気持で、ベースでの活動を始めております。それではまた。 鹿野 勝彦

**第四信** 九月に入り、日本でもそろそろ朝夕には涼しさを感じるころとなったかと思えます。ここエベレストのBCでは八月末以来比較的好天が続いています。午後から夜にかけては必ず新雪が降りますが、それも数センチといったところで、朝から午前中一杯はほぼ晴れ、行動には全く支障ありません。この天候に助けられて、アイスフォール工作、BCの設営も、ほぼ順調に進んでおります。

アイスフォールのルート工作は、八月二十九日より、スキー隊の経験者、石黒を中心に開始されました。BCより五、七五〇m付近までは、自身経験している七十年春と比べても、はるかに良好なコンディションで、全く不安を感じずに通過できる状態、その上はさすがにかなり不安定なセラック帯で、私達経験者にとっては悲痛な憶い出の場所ですが、それでも今のところ荷上げルートとして、かなりしっかりしたものを確保できるところまでできております。C1は上部の不安定なセラック帯を抜け切った標高約六、〇〇〇mの地点で、ルート工作開始から六日目の九月三日に到達しました。同日から本格的な荷上げもはじまり、隊員、シェルバあわせて四十名を越える荷上隊によって、連日六〇〇キロをこえる荷がアイスフォールを越えるようになっております。

高度順化も、二、三名を除いては、現段階ではスムーズに進んでおり、湯浅リーダー以下、隊員のほとんどが五、〇〇〇m台での体調に自信をもって行動しております。一方、シェルバも全員元気で活動しておりますが、中でも第一サード、ハクバ・テンジンの水際立った統率ぶりを、アイスフォールリーダー、サンゲのみせたルート開拓の腕前は、まさに特筆に値します。

九月四日には、田中以下四名の隊員と六名のシェルバがC1入りし、南壁直下のアドバンスベースへのルート工作を開始しました。私達としては、現在の快調なベースを維持して九月中旬に八、〇〇〇mラインへの到達という。次の目標に全力

を注ぐとともに、一応突破したとはいえ、また比較的コンディションが良好とはいえず、やはり不気味な危険を秘めているアイスフォールの保守管理にも充分の注意をはらっていきたいと思っております。

BCは既に完成し、食堂、キッチン、病院といったテントから二、三名ずつ隊員の泊っている居住テントまで、四十棟近いテントのいずれにも活気の溢れた声が聞こえます。しかしこれもあと数日で、九月半ばには、隊の主力はウエスタンクワムのABCへ集結し、BCもしばらく静けさを取りもどすこととしましょう。それではまた。

鹿野勝彦

第五信 すっかり御無沙汰致し申訳ありません。日本の山では、すでにあちこちで初雪の便りのきかれるころでしょうか。こちらでは、九月十日すぎから三、四日、悪天が続きましたが、その後は連日快晴が続いております。しかし、果していわゆるポスト・モンズーンの好天期間に入ったのかどうかはまだ一つつかめません。ウエスタンクワムのあの耐えがたい日中の暑さは相変わらずです。

隊の進行の方は、依然順調です。九月九日南壁基部、約六、六〇〇mの地点にABCを建設。十日からいよいよ待望の南壁へのルート作業を開始しました。その後しばらく続いた降雪のためもあって、南壁中央のルンゼは、新雪層が頻発し、ルートは必然的に、いわゆる「軍艦岩」からやや右手へ斜上していく形になっております。しかしこの部分も、雪が柔かく、長めのスノーバーがようやく効くという感じで、計画全体の一つの要である、第四キャンプの位置についても、今のところ、はっきりした地点が決められない状態です。しかし第三キャンプは九月

十八日、飯塚隊員らによって、「軍艦岩」直下の約七、〇〇〇m地点に建設され、ここからフィックスロープも着々と伸びているので、コンディションが安定すれば、すぐにも第四キャンプ、第五キャンプと建設される態勢にあります。荷上げの重点もようやくアイスフォールからウエスタンクワムに移り、今日現在すでに二十名以上の隊員、三十名以上のシェルパが第一キャンプから、第三キャンプの間に展開しております。隊員のコンディションも全体として予想以上に良好で、ローテーションを組むにも、あまり無理がからず、順化の面からは、まず考え得る限りの順調さといえそうです。BC入り以来、約一か月が過ぎました。登攀活動も、そろそろ後半に入ります。本当の厳しさはぶつかるものこれからでしょう。気を一層ひきしめて前進を続けたいと思っております。それではまた。

鹿野勝彦

### 会務報告

#### 九月理事会

(十八日午後八時四十分～十時 世田谷区 青年の家)

▽出席者 今西会長、織内副会長、板倉、浜口、埴山、宮下、浜野、山本、神崎、今成、須田、田村、松丸各理事、山崎、金坂各評議員

#### 議題

- 一、松方家御香典の件
- 二、葬儀の件
- 三、新刊図書費用として約十五万円支出の見込、香典持参された会員分はJACで集め、諸掛り充当残を松方家に持参する。
- 四、事後処理、総務理事にお願いする。
- 五、出箱 神崎、植村、木村が行なう。
- 六、受付 JACより神崎、植村、渡

辺(節)、須田、関田(美)、山口(節)、宮下各氏にお願いする。

三、山研状況について  
準備は九月十六日で終る。但し電気は来年となる。

\* オープニング(十月八日予定)  
西糸屋で土地関係者(五〇名)三〇〇〇円/人で二次会を行なう。

\* 管理人は前常務理事坂下氏を予定していたが、本人が辞退したため地元および信濃支部と話し合いを継続中。

\* 山研委員会内で意見統一が出来ていないが準備が進行したため不祥事が生じた(管理人の件)

\* 管理人が決定する迄は特定の場合(整備関連時)のみ使用し、一般会員には使用規定等完備後オーブとする。

四、ネパール駐在大使歓迎会  
九月二十四日、日ネ協会と共催にて実施をする。時間的余裕がなかったため役員関係のみ二〇〇名に通知發送済み。

五、図書交換会  
九月二十九日迄に出品申込をお願いします。図書重複分を山研に移す。

六、十月理事会 十月五日(金)に行なう。議題申入れがあれば総務理事

七、評議員会 十月二十二日(月)

#### 図書室便り (昭和48・8)

##### 新刊図書受入報告

- (1) 岩波書店寄贈
- (2) 北日本新聞社寄贈
- (3) 三田博雄著『山の思想史』昭和48
- (4) 北日本新聞社寄贈
- (5) 富山県教職員山岳研究会・富山県高等学校体育連盟山岳部編『越中の百山』昭和48

(2) 北日本新聞社編『立山とガイドたち』昭和48

文部省登山研修所寄贈  
(1) 文部省『登山指導者研修会テキスト』昭和48

毎日新聞社寄贈  
(1) 森村浅香著『おばあさんアルプス始末記』昭和48

二見書房寄贈  
(1) 佐伯富男著『あるガイドの手記』昭和48

白山社寄贈  
(1) 深田久弥著『ヒマラヤの高峰2』昭和48

(2) 深田久弥著『ヒマラヤの高峰3』昭和48

山と溪谷社寄贈  
(1) 佐竹義輔監修『お花畑』昭和48

湯口康雄氏寄贈  
(1) 湯口康雄著『黒部雜記』昭和48

孫慶錫氏寄贈  
(1) 深田久弥著『孫慶錫訳論』ヒマラヤ巨峰初登頂記』昭和48

堀勝彦氏寄贈  
(1) 堀勝彦著『アンナプルナ・ヒマール』昭和48

日本山岳会東海支部  
(1) 日本山岳会東海支部  
日本山岳会東海支部『海外登山研究資料 自第一号至第四号』昭和48

定期刊行物受入報告

【部報・会報】  
(1) 兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』(48-8)

(2) 山岳会『山岳』No. 144 (48-8)

(3) 日本地質資料協会『古地図研究』No. 42 (48-8)

(4) 林野庁『国有林』No. 7 (48-7)

(5) 国立公園協会『国立公園』No. 284 (48-7)

(6) 京都山岳会『京都山岳』No. 580 (48-8)

(7) 長野県山岳総合センター『所報』No. 9 (48-7)

(8) 奥多摩山岳会『O・M・C・レポート』No. 285 (48-8)

(9) 日本自然保護協会『自然保護』No. 133 (48-6)

(10) 低い山を歩く会『低山』No. 98 (48-8)

日本登山協会『山と雪』No. 182 (48-7), No. 183 (48-8)

【雑誌】  
(1) 『アルプ』No. 186 (48-8)

(2) 『岳人』No. 315 (48-9)

(3) 『山と溪谷』No. 420 (48-9)

(4) 『創文』No. 120 (48-7)

【その他】  
(1) 京都市中休連ワンダーフォーゲル委員会『活動記録』72・4・73・3第11号

(2) 日本ヒマラヤ山岳協会『ワカシジロ』遠征報告書「カンジエラルフ初登頂」

(3) 東京池田山岳会『韓国雪岳山親善登山計画書』8・11・8・19

(4) 自然同人ヒマラヤ委員会『HIMALAYA EXPEDITION 73』

(5) 日本ネパール協会『会報』No. 8 73-8

【新着海外雑誌】  
1. "The Alpine Journal" Vol. 78, No. 322, 1973.

2. "Alpinismus" 73-7.

3. "Appalachia Bulletin" Vol. 39, No. 7, June 73.

4. "Der Bergsteiger" 40, Jahrg. 73-6, 73-7.

5. "Osterreichischer Alpenverein" Heft 5/6 73.

6. "Osterreichische Alpenzeitung" Folge 1389 5/6 73.

7. "Kivista Mensile Anno 94, N. 3 73.  
8. "Verkehrsbuch" 47, Sommer '73

ルーム誌(48年8月)

3日(金) 図書委員会  
6日(月) 集委員会  
16日(木) 鳥水、理太郎、金次郎展委  
17日(金) 山日記の会  
27日(月) 集委員会  
31日(金) 鳥水、理太郎、金次郎展委  
員会

八月中来室者 三十一名  
会 員 異 動  
退会者(48年8月)  
三一九 後藤 恵治

訂正 会報三三八号会務報告(一一頁)除籍者氏名欄中一二三四〇大山山岳会とあるを取消します。

上高地山岳研究所建築基金  
応募者氏名(昭47・7・14)

[単位千円、百円以下切捨]

中屋健式50、浜田一馬3、青木昇10、中野明3、古屋学而10、岡村浩子3、蓮田清10、村山金吾10、町田立穂10、足立源一郎10、石渡清10、神保信雄2、海野治良5、小林勝3、穴田雪江5、坂口敬一郎3、加藤喜一郎10、村上智一10、森信昭20、川村博通10、早乙女綾次10、国分貫一10、徳水芳雄5、小林重一3、中尾佐助5

村尾金二5、遠藤孝夫3、神谷恒吾3、矢田城太郎5、羽賀育子3、高木孝3、千谷杜之助5、松田直行11、庄一20、水越誠一10、坂本直行、小谷隆一5、細川沙多子5、尾上昇3、大倉寛5、小林康宏5、大西雄一3、中村光三5、安斉正明10、小林猛臣5、土合敦彦3、高山忠四郎20、田中弘美10、吉武正子10、中村進10、山口季次郎10、宮下秀樹10、山口健児10、滝口脩5、滝口操5、川喜田壯太郎10、齋藤音蔵3、岡部みち子10、東谷時夫5、黒柳満義3、小林年3、渡辺武男10、河野幾雄10、広瀬吉彦10、佐々木健太郎10、大塚武3、田高卓士3、近藤恒雄5、寺村栄一5、山崎郁郎3、土屋満3、三上忠人3、門倉賢10、陸田峠郎10、竹勝生3、北博正3、山本憲二3、井上潤3、療谷晃3、前田浩5、村井喜一10、平野彰3、水野祥太郎10、寺本澁4.6、朝比奈英三5、河村栄二5、高橋信成3、高田健夫5、白田昌一5、金沢健5、市川章弘5、石森芳太郎10、鳥山梯成40、谷博5、岡本英治3、外山義夫10、熊谷太三郎10、茶谷東海10、織田収10、荻野昌宏3、山口滋嗣3、山本良三5、白石信尚3、白石慶子3、宮原博通5、小林義正10、野口秋人20、岩瀬浩10、猪股清郎3、中原繁之助5、徳永篤司10、本多紀元10、今西寿雄10、松村潤5、吉阪隆正3、小滝清次郎3、新堀春樹3、今井二郎3、湯浅道男10、堀田誠三3、中上和義3、渡辺芳夫5、久保利夫10、山田和雄10、渡辺弥生10、青木正樹10、近藤暉5、境野俊男3、宮崎辰雄5、川田善明10、坂下心一10、浅野清彦3、三枝守博10、塩田伸雄10、山崎徹20、平井拓雄3、白川義員5、中橋右近3、吉田薫5、岡本如矢5、脇坂順一3、皆川完一3、渡辺洋子3、和田一男3、岩崎三郎10、市川次良10、野上成勇3

近藤信行10、杉山孝10、一原有徳5、中原万次郎3、馬場忠三郎5、坂本桂3、村岡純3、鈴木利雄3、風見武秀5、山下嘉彦3、渡辺利治3、中島伊平10、神原達10、船越好文5、佐々木誠3、小杉伸一5、本多夏生10、林稔10、日曹山岳部3、府川裕3、深田志げ子5、丸茂キクエ5、関口令安10、大塩糸児3、福田嘉四郎3、野口末延10、川津鉄兵3、東京学芸大学山岳会3、宮島真一郎5、加治甚吾5、村田数之亮5、早川種三20、広瀬誠3、亀井公5、小柴宏昭5、高遠宏10、渡辺正臣5、大内東三3、村井葵5、市川進5、野口茂10、武田益太郎3、谷川菊雄5、小俣武男3、谷村文平5、吉川正治3、武藤晃3、立原正明3、山崎金次郎5、北村猛5、藤山愛一郎10、小田和友蔵10、吉沢一郎10、関野重政3、庄司駒男3、渡辺嘉男3、山田圭一3、高橋一雄20、斎藤健治3、松平直寿3、大山力10、福山徹3、田淵邦彦3、大島輝夫5、小崎司郎3、山川三千雄5、宗実慶子3、横田明男10、浜口巖根30、松方三郎50、エーデルワイス30、筒井計男5、小宮玉樹3、柳原弥之助3、松村寿5、安藤文子2、原全教2、三枝礼子10、奥山文次13、今井嘉道20、石原達夫5、篠崎仁3、雁部貞夫3、湯浅充泰3、山本恵志郎3 (以下次号)

昭和四十八年十一月十日発行  
東京都文京区湯島一六六一  
利根川商事株式会社  
発行所 日本山岳会  
編集代表 山崎安治  
(813)二二八六(代表)

東京都港区赤坂一丁目三番六号  
振替口座東京四八二九番  
株式会社 技報堂  
印刷所

“ヒマラヤ山岳の旅18日間” 三井航空サービス株式会社 旅行部 団体課

東京都港区新橋1-18-1  
電話(504)0271(大代表)

|      |   |       |                                   |
|------|---|-------|-----------------------------------|
| 期 間  | 昭和49年3月10日~3月27日  | 日 程   |                                   |
| 費 用  | ¥358,000 (ローン可)   | 第1日目  | 東京→ニューデリー                         |
| 定 員  | 15名   | 第2日目  | ニューデリー→カトマンズ                      |
| 御案内人 | エベレストビューホテル社長 宮原 巍氏   | 第3日目  | カトマンズ滞在                           |
| 安全対策 | 医師並びに参加者の皆様の安全を図るために、現地人医師を第9日目より15日までエベレストビューホテルに滞在せしめると共に、酸素ポンベの用意も致しております。 | 第4日目  | カトマンズ→ポカラ                         |
|      |   | 第5日目  | ポカラ滞在                             |
|      |   | 第6日目  | ポカラ→カトマンズ                         |
|      |   | 第7日目  | カトマンズ滞在                           |
|      |   | 第8日目  | カトマンズ→ルクラ:徒歩にてモンジョへ(モンジョテント泊)     |
|      |   | 第9日目  | モンジョ→ナムチェバザール                     |
|      |   | 第10日目 | ナムチェバザールより徒歩にてエベレストビューホテルへ        |
|      |   | 第11日目 | エベレストビューホテル滞在                     |
|      |   | 第12日目 | エベレストビューホテルよりタンポचेエトレッキング(タンポचे泊) |
|      |   | 第13日目 | タンポचेよりエベレストビューホテルへ               |
|      |   | 第14日目 | エベレストビューホテル滞在                     |
|      |   | 第15日目 | エベレストビューホテル→カトマンズ                 |
|      |   | 第16日目 | カトマンズ滞在                           |
|      |   | 第17日目 | カトマンズ→カルカッタ                       |
|      |   | 第18日目 | カルカッタ→東京                          |

# 茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

**ブータン感傷旅行**  
小方全弘著  
〈菊判280頁〉定価980円

**森林・草原・氷河**  
加藤泰安著  
〈A5判482頁〉定価1,500円

**すこし昔の話**  
初見一雄著  
〈四六判400頁〉定価1,200円

**遠い山・近い山**  
望月達夫著  
〈B6判334頁〉定価960円

**山の古典と共に**  
大島堅造著  
〈四六判280頁〉定価1,500円

**雪山・藪山**  
川崎精雄著  
〈A5変型判340頁〉定価1,200円

**雪原の足あと**  
坂本直行者著  
〈B5判206頁〉定価2,800円

**遙かなる未踏の尾根**  
マカルー1970年  
日本山岳会東海支部  
〈B5判430頁・カラー64頁〉定価4,800円

**山日記1973年版**  
日本山岳会編  
〈A6判344頁〉定価850円

**山岳**  
66年 2,300円  
65年 2,000円  
64年 2,000円  
63年 2,200円  
62年 2,000円  
日本山岳会編  
〈A5判〉 総索引 1,000円

**国立公園カレンダー**  
国立公園協会編  
〈A5判リング綴り〉定価960円

**屋久島・美しい豊かな自然**  
赤星昌編  
〈B6判202頁〉定価480円

**山で唄う歌1集・2集**  
戸野昭・朝倉宏編  
〈A6判126頁〉1集240円・2集280円

**いろりばた**  
南会津山の会  
〈B24どり判320頁〉定価1,900円

**シプトンの自叙伝**  
**未踏の山河**  
大賀二郎・倉知敬訳  
〈A5判440頁〉定価1,900円

**日高山脈**  
北大山の会編  
〈菊判362判頁〉定価2,200円

**山に忘れたパイプ**  
藤島敏男著  
〈菊判584頁〉定価2,500円

**日本の山旅**  
足立源一郎スケッチ帖  
〈A変型208頁〉定価3,600円

**登頂ゴジュンバ・カン**  
高橋進編  
〈A5判350頁〉定価900円

登山・スキー用具専門店

## 山の店

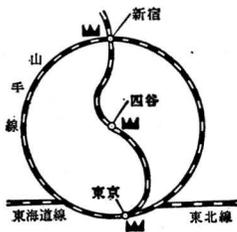
大阪市北区梅ヶ枝町101  
TEL. 06(362)5736

- 買いやすい  
山の店
- 北へ来たたら  
山の店
- フレッシュな  
山の店

山とスキーの専門店

## 片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9  
片桐盛之助  
電話 東京(831) 1794・6680 番



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地  
TEL (351) 7432-1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五  
TEL (271) 1560-8575

新宿店 新宿ステーションビル四階  
サービスショップ  
TEL (352) 6564  
日本信販加盟店



山友社 たかはし

なるべく、なんにも  
持たない方がいい  
けれど、どうしても  
要するものがある。  
なにしろ人間ですから  
と、山山、さすかり

どしても、必要なものを  
をこしらえてみる  
ま責任はもっています

かたる(シンテイ)  
でんや 281-8456  
中央区・八重洲4丁目

### 秀山荘

登山とスキー具

## イワタ

東京都中央区日本橋通2-1  
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

## 好日山荘

東京店・中央区日本橋 2-4-5 (561) 3600・(567) 9031  
東北店・中央区日本橋 2-4-4 (561) 0966 スキー一帯  
大塚店・北区豊島 1-1-1 目47 (364) 0933 (代)  
福岡店・福岡市 1-4-28 34440

